
私の最高傑作は冥王です

屋猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の最高傑作は冥王です

【Nコード】

N4327BA

【作者名】

屋猫

【あらすじ】

魔女のジュラは魔の森で魔剣に体を貫かれた男を見つける。

その男を憐れに思ったジュラは、男の命を助けたのだが・・・

後に冥王として奈落の王となる魔剣士オズウェルと、冥王を生み出してしまった魔女ジュラのお話し。

1 魔の森 ナロモミ にて（前書き）

初投稿です

1 魔の森 ナロモミ にて

ジユラは薬と防具の練成に使用する材料を調達し、魔の森ナロモミの空を帰途についていた。

しかし突然、乗っていた騎獣が警戒態勢に入ったのだ。

騎獣の様子から魔物の気配ではない。騎獣が警戒しているほうへ慎重に近づいてみる。

やがて、騎獣が警戒していたものが何なのかジユラにも分かった。

血の臭いだ。濃い血の臭いが立ち込めている。それは、上空にいる防護布を口につけている、ジユラの所まで漂ってくる。

今は見えない地上は、どんな状態になっているのか。

しかし、ジユラが現在いる場所は魔の森ナロモミとはいえ、その入り口付近である。最深部でもないのに、凶暴な魔物が出る事はまずない。

「・・・はぐれ妖魔でも出たのかなあ」

地上には生き物の気配はない。鬱蒼と茂る木々の間から、様子を窺うことは出来ない。だが、騎獣も血の臭いを警戒しているだけで、危険はなさそうである。

定期的に魔の森ナロモミに来る身としては、様子を確認するくらいしておいた方がいいだろう。

騎獣に地上に降りるように指示する。ゆっくりと地上の様子が現れてくると、そこは血の海だった。

魔の森の大地は、土地全体が魔の瘴気を帯びているために青白い。^{ナロモミ}
そして草木は灰色を帯びてくすんでいる。

だがジユラが降り立ったそこは、辺り一面、鮮やかな赤に染め上げられていた。青白いはずの地面も、灰色の草木も赤い。真つ赤だ。所々にみえる白っぽい物は、骨や肉片だろう。元の原型を判別するのは難しいが、人間だったようだ。

よくみると、赤い海には剣や鎧が沈んでいる。それから判断するに、どこかの国の騎士たちの物のようだ。

——・・・魔術の気配がする。何かの儀式かなあ？

ざっと周囲の様子を見たジユラは、空間に立ち込める魔術の気配に気付いた。魔女であるジユラが使う魔法とは構造が違うため、はつきりとは解らないが、何かを成す為に儀式的な魔術が行われていたようだ。

——複数の魔術の気配がする。複雑な構築をしているみたいだけど、・・・失敗したのかなあ。

血の渇き具合から、半日近く経っているようだ。構築されていた魔術は殆ど拡散して、その全容は掴めない。残った余韻が獣達を遠ざけているが、それも直ぐに消えるだろう。明日には僅かな痕跡を残して、獣や下位の魔物が全て片付けてしまいうに違いない。

ジユラはこの場に留まっても得られる情報はもうないと、その場を発とうとした。

だがしかし、その時、微かな命の気配を感じた。

この地獄のような場所の中央付近。魔術の気配が一番濃い辺りだ。人間がこの場で生き延びているとは思えない。気のせいかもしれないが。

ジユラが中央に近づくと、はたしてそこには、人間が生きて居た。

「驚いたこと。こんな状態で、生きているなんてねえ」

その人間は全身血まみれで、肌の色も髪の色も分からない。体格からして男だろう。だが、背丈は解らない。

四肢が膝、肘辺りで千切れていたからだ。胸に中ほど折れた両刃の剣が刺さっている。しかし、その胸は上下しているのだ。

「これは、・・・この剣に生かされているのかなあ？」

男の状態はどう考えても人間が生きているはずのないものだ。上級魔族の中でも再生能力の高い者で無ければ、瀕死の状態だ。

「抜けば、死ぬかな？・・・いや、うーん、剣に魔力が？魔術が半端に起動してるのか？・・・抜いたら妖霊化しそうだなあ。」

男に突き刺さっている剣。おそらく行使された魔術の影響で、不完全な魔剣と化しているようだ。その剣の魔力の影響で男は死なない。しかし、半端な魔剣は、男を再生するほど魔力を持たないため男を回復させることは出来ず、結果的に

「死ねない状態でここに……。剣を埋め込めば、助かるかなあ？ いや、体は治るかもしれないが……。精神がどうなるか」

ジユラは男の状態を詳しく観察して、深く溜息をついた。このまま放っておけば、十中八九男は妖魔化するだろう。それも、ここに漂う数知れない無念の霊を抱えて。剣を抜けば男は死ぬが、その魂は魔術の影響を受け霊体の妖魔、妖霊となりそうだ。

男に刺さっている剣を浄化し、抜いてしまえば良いのだろうか、

「困ったな。このまま放置するのは物騒だが、解放することも出来ないし」

魔女のジユラは魔法を使うことができる。魔法は人間が使う魔術よりも高度で複雑な事象ををひき起こすことができるが、万能ではない。

そして、人間の使う魔術は欠陥が多く、魔法で強引に干渉すると魔力が暴発してしまうことがあるのだ。

抜くには、中途半端に作用している魔術に魔法で干渉しなければならぬだろう。

「……仕方ないな。家に持って帰るかあ」

2 黒い森 ミリロコウ にて

森で半死半生の男を見つけてから13日目。ジユラは黒い森ミリロコウにある、自宅に籠っていた。

ジユラは一年の半分を素材集めの旅、残りの半分を練成に費やしている。数ヶ月旅に出る事もあれば、同じく家に籠る事もある。

ジユラの自宅は、生活区間と錬金術を行う工房、そして、騎獣を飼育している小さな牧場で構成されている。

生活区間は千年を超える霊樹と融合しており、その地下は、試験的な魔法を行使する特殊な空間となっていた。

地下は霊樹の根があちこちから顔を出している。その根が、魔法の暴発を防ぐのだ。

地下の一番奥、根が絡みつくように白い塊を支えていた。3メートル以上はありそうな巨大な塊である。表面が細かい糸で覆われ、虫の繭の様だ。

白い繭は鼓動のように淡い明滅を繰り返している。ジユラは繭にそっと手を触れ、目を閉じて瞑想しているようだった。

「今晚、あたりかな」

繭から手を放すと、ジユラは眉間に皺を寄せて黙り込んだ。そして視線を地下にある棚に移す。

地下の棚には、様々な魔具が置かれている。ローブ、楯、鎧など

の防具。剣、弓、斧、杖などの武具。聖気、邪気を帯びているものなど様々であるが、その中にガラス瓶に入った剣があった。

魔ナロモミの森で男を貰っていた剣だ。折れた剣は赤黒く血に濡れたまま
で、本来の色は分らない。

そして、剣の先には脈打つ心臓が突き刺さっていた。

ジユラは男を家に連れ帰り、剣と男の肉体を分離させようとした。霊樹の根が守る地下でなら、多少強引でも問題ないだろうと判断したからだ。

しかし、予想外の問題が発生したのだ。中途半端に魔剣と化していた剣は、これまた中途半端に男の肉体と融合していた。

行使された魔術と魔の森の瘴気、そして辺りに満ちていた無念の怨念が重なり、男の肉体を人ならざるものへと変えてしまっていた。

男の体は半分魔剣となっていたのだ。折れたように見えた剣は、その半部分が男の体に溶け込んでしまっていた。

ジユラは当初、男と剣を分離し、剣は浄化して無に返し、男も人間として葬るつもりだった。

そもそも、剣が分離してしまえばその力で生きながらえている男は、死んでしまはずだった。

しかし、計画的に起きた魔剣化ではないので、融合の仕方が複雑でなおかつ不完全なため、分離が不可能な状態になっていた。

男と剣を滅する方法もあるが、ジユラの魔力では魂までは滅ばせない。深い恨みを抱えた魂は世界にとって、厄災にしかないだろう。

残る選択肢は男も剣も一緒に封印してしまうことだ。

それを霊樹の根元に埋めてしまえば、半永久的に見つかる事もないだろう。

そして、男も死地の境を半永久的に彷徨うことになるのだ。

ジユラはこの男が何処の誰なのか、善人か、悪人か、名前すら知らない。

だが、ジユラは赤の他人であるこの男の境遇が、とてつもなく憐れになった。

だから、助ける事にしたのだ。人間でも無く、魔剣でもなくなっ
てしまったこの男を。

失われた四肢の代わりを生成し、男の肉体と繋げた。

欠損していたのは他に、左目、臓器が幾つか、それらも全て入れ
替えた。

脳が無傷だったのは幸いだった。脳の再生は骨が折れるし、失敗
しやすい。

おそらく、再生されなかった箇所は、魔剣が男を貫く前に負った
傷だろうと思われた。ゆえに、魔剣は男の完全な状態を知らない、
よって完全な再生が行われなかったのだ。

「止めを刺すために使われた剣が、その命を繋ぐなんてねえ。」

男の肉体を改造しながら、ジユラはぽつりと呟いた。

だが、そこである考えが胸をよぎる。

——この剣が、男を殺すための物ではなく、この状態で生かし続けるためのものだったら？

その考えにジユラはぞつとする。人間は愛情深い者いるが、同じくらい残酷で冷酷な者もいることを、ジユラはよく知っていたからだ。

あらかた肉体の差し替えが終わると、元の肉体と馴染ませるために、男の体を妖天の繭の中に入れ特殊な羊水で満たした。

その作業に三日ほど掛かったが、その間も男と魔剣の融合は少しずつ進んでいた。男の体から出ていた部分は、当初の半分もない。

男を繭に入れてから10日。魔剣は殆ど男の心臓と融合していた。棚に置いてある瓶は、魔剣の様子を見るための魔具だ。

今夜は満月、月が真上に来る頃には男と魔剣は完全に融合するだろう。そして妖天の繭は破れるはずである。

「結構無茶な繋げかたしたからな、ちゃんと人の形になってるかなあ？」

3 満月の夜に

夜空に大きな満月が輝いている。魔力が満ちている黒い森^{ミッドガル}では、他の地域よりも大きく目に映る。

ジュラは居間の一階の暖炉の前で、騎獣のヴァスとまどろんでいた。

ヴァスは巨大な黒い虎の妖獣である。天虎^{てんこ}と呼ばれる、東方の大陸に住む妖獣で、空を飛ぶ事ができる大型の騎獣だ。

天虎^{てんこ}は気性が激しく、人にはまず馴れないが、足が速く頭が良いうえに戦闘能力も高い。小さい幼獣のころから育てれば、素晴らしい騎獣になる事で有名である。

天虎^{てんこ}は白い毛皮に黒い縞模様が美しい妖獣なのだが、極稀に黒い体毛を持つものが現れる。

ヴァスは黒地に朱金の縞をもつ、黒天虎^{こくてんこ}だ。

ジュラは極上の黒毛皮に埋もれながら、睡魔と闘っていた。

「ううん。眠い、眠いよお、ヴァス。・・・ね、たら・・・駄目、なの・・・に」

男を連れ帰ってから二週間近く、ジュラは働きづめだった。一つのことについて没頭すると、周りの事が見えなくなる研究者気質のあるジユラは、不眠不休で男の再生作業を行っていたのだが、ここで限界が来てしまった。

騎獣のヴァスは太く逞しい尻尾でジュラの頬を撫でていたが、主

人が完全に眠りに落ちてしまった事を確認すると、ジユラを包みこむように自分も寝る体制に入ってしまった。

ジユラは小刻みに揺れる振動で目が覚めた。誰かがジユラの体を揺さぶっている。

連日連夜の作業ですっかり深い眠りに落ちていたジユラにとっては、とても不快なものだ。

「うう、あと、少しだけ、・・・あと少しで、・・・少し・・・で？」

もう一度、眠りの世界に落ちようとヴァスの毛皮に縋りつきかけたジユラは、突然跳び起きた。

「あと、少しで生まれるじゃんかあ！」

ヴァスは突然大声を上げたジユラに迷惑そうな視線向けたが、直ぐに目を閉じて寝てしまった。

「い、今、何時だ。どのくらい寝こけてたあ！」

ジユラは寝起きで乱れた髪もそのままに、立ち上がろうとして、出来なかった。

「え？う、わあ、あ！・・・ゆ、ゆ、揺れてる？」

先ほど感じた小刻みな振動は、家の床が揺れているためのものだった。それは徐々に大きくなっているようで、ジユラは床から立ち上がる事が出来ず、座りこんでしまった。

イスが倒れ、棚の瓶が落ち、籠の中の物が散乱する。
揺れはどんどん激しくなり、棚や大きな壺までもがぐらぐらと揺れ始めた。

「霊樹の根が、震えている？・・・まさか、そんな、魔力が暴走しかけてええ、あわわぁ」

暖炉の前から動くことが出来ないジユラを、ヴァスが口に銜え、と裏口にある騎獣専用の入り口から、外に飛び出た。

ジユラは家の外に飛び出してから、目に飛び込んできた光景に呆然とした。

「れ、霊樹が、・・・そんな馬鹿な。」

ジユラが住居にしている霊樹は、マルガゴクと呼ばれる木の変種である。魔力を根から吸収し葉に蓄積するという特徴を持つ。そして、本来は人の背丈ほどにしか成長しない。

だが、ジユラの住む霊樹は突然変異により、幹が一軒家ほどもある巨木に成長して霊樹となった。大きさも異常だが、木が蓄える魔力も尋常な量ではない。

マルガゴクは、魔力と清水を糧に成長するので、それさえ枯渴しなければ枯れることはないのだが。

「霊樹が、か、枯れてる！」

ジユラはヴァスの背に乗り霊樹の様子を見て廻り、愕然とした。

青々と茂り、夜の暗闇の中でも魔力に満ちた葉はキラキラと輝く。幹は逞しく、大地に伸びる根も力強い。

魔女の森とも呼ばれる、アンティyakティカにある、母なる木程ではないが、美しい大樹だ。

その霊樹は、枯れようとしていた。瑞々しかった葉は茶色く萎み、幹は輝きを失い、いくつもの亀裂が入っている。根にはまだ輝きが残っているが、それも徐々に失

われているようだ。おそらく急激に魔力を失ったためだろう。

ジユラが感じた振動は、霊樹の幹が枯れ崩壊し始めた為に発生したものだ。た。

ヴァスの背に乗り、空中にいるジユラには振動はつ伝わらないが、目視で見る家は激しく揺れているようだ。おそらく家の中は見るも無残な状態だろう。

「そんなあ！こんな破壊的に魔力を使う魔法なんて、使っていないのにい！」

ジユラが霊樹の無残な姿に、思わず叫ぶと、霊樹の崩壊と振動が止まった。

良く視ると根の部分は僅かに輝きが残っている。完全に枯れてしまふことは無かったようだ。

「・・・あれか？これは、あれが原因か？・・・あの人間と魔剣か？」

霊樹とその根元にちょこんとくっ付いている我が家を視界に入れながら、ジユラの思考はぐらぐらと揺れたままだった。

——人間だぞ！霊樹の魔力吸い尽くすって、どんだけじゃい！・・・あれか、適当にくっ付けた手足の素材の、あれとか、それとかか！

心中でぶつぶつと呟きながら、ジュラはゆっくりと家の方に近づいた。

補強と改修の自動魔法を掛けている家は、思ったほど外見的な被害は少なく、修復も始まっていた。

ヴァスには牧場に戻るように指示を出し、ジュラは家の中に入る。

——・・・んー、徹夜の乗りと勢いで作ったからなあ。何混ぜたかなあ。正確に思い出せないぞ。まずいなあ・・・

家の中は竜巻が中を通過したようなひどい有様だったが、二体のゴーレムを起動させてさっさと地下室に向った。

地下は予想より遥かに状態が良く、物も散乱しておらず、むしろ何時もよりきれいで

「きれいすぎだあ！・・・作った魔具が、全部！・・・無くなってる！」

それはジュラにとって、霊樹が枯れる光景よりも衝撃的な光景だった。

ジュラが今まで制作、或いは手に入れ改造してきた数々の魔具。それも厳選した魔具ばかりをこの地下に保管して合ったのだが。

「ない、・・・ない。・・・一つもない！焰竜王の剣も、鳳凰弓も、邪剣アグニグルも、聖賢天の箒手も、自信作の飛仙刀もお！」

所狭しと並べていた、自慢の魔具たちは綺麗さっぱり消え、棚しが残っていない。

そしてこの空間にあるのは空の棚と、魔具の消失に真白になった

ジユラ、そして

「……ん、今、何か音が？……あれ、何しに地下に来たんだっけ？」

物音でシヨックから僅かに立ち直ったジユラは、本来の目的を思い出し、慌てて妖天の繭のところに向う。

「あれれ？…随分、ちいさい、……なあ？」

繭は破れたところが下となり、中のものは見えないが、盛り上がり部分から、中の大きさを予想する事は出来る。

それは明らかに、小さい。

四肢を繋ぎ、繭に入れた時はジユラより遥かに大きかったはずだ。目の前の塊は、四肢を繋ぐ前よりも小さくなっている。

「失敗かあ？でも、息は……してるねえ」

ジユラは白い繭の塊にそつと近づくと、繭をそつと破いた。

「……こ、ども？」

白い繭の中には、黒髪の子どもが横たわっていた。10歳ほどだろう。足を抱え込むようにして折り曲げ、胎児のように丸まり横たわっている。

「おかしいなあ、……逆行の魔法なんて、使ってないぞ？」

おそらくこの子どもは、あの魔剣と融合した男なのだろう。繋がった手足には薄っすらと、見覚えのある魔法の刻印が残っている。

——・・・予定外の事だらけだなあ。人の原型留めてないほうが、まだ納得できるわあ。・・・性別も変わって、・・・ない。

「う・・・ん」

ジュラが子どもの足に触れたとき、子どもが僅かに声を上げた。子どもの顔を見ると、目蓋の下で眼球が動いているのが分かる。覚醒が近いようだ。

ゆつくりと黒い睫毛が持ち上がる。右目は紫眼、左は金眼のオツツドアイだ。

焦点が合わないのか、異色の眼は僅かに視線を彷徨わせていたが、覗きこんでいるジュラに気付いたようだ。

ジュラは笑顔を浮かべながら、まだ完全に覚醒していない子どもにゆつくりと、優しく話しかけた。

「私はジュラ、土の魔女のジュラ。」

「・・・ジュ、・・・ラ？」

「そうそう、あなたの名前は？・・・自分の名前が分かる？」

「・・・名、前・・・名前は」

子どもの声は掠れていて、聴き取りづらいものだった。

ジュラの質問に子どもは視線を彷徨わせる。思い出そうと記憶を探っているようだ。

「オズ・・・・ウエル。・・・名前は、オズウエル」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327ba/>

私の最高傑作は冥王です

2012年1月12日19時02分発行